

## 「欲望と、技術の哲学」ノート

### 自己紹介

ご紹介に与りました木岡です。関西大学で哲学・倫理学を教えています。私の研究テーマは「風土学」、別名「地理哲学」ですが、近年はいわゆる哲学や倫理学とは違う学問であると主張して、開き直っています。

今年度末で退職します。大学を辞めてからは、一私人として、自分の考えを社会に発信する活動に入ります。その前に、準備として web サイトを立ち上げ（11 月）、HP 上でいろんな人たちとやりとりをしていくつもりです。デンソーのような有名企業が、私の研究に関心をもたれ、このようなイベントにお招きくださったことは、今後に向けて最高の門出となりました。関係各位に深く感謝申し上げます。

### 「欲望」とは何か

テーマに掲げられた「欲望」とは何か、欲望と技術はどう結びつくのかについて、考えるところをお話します。

人間誰にでも「欲」はある、欲のない人はいない。間違いないことですが、よく似た言葉として、「欲求」と「欲望」が使われます。この二つは、同じ意味でしょうか——違うと思います。「欲求」は、のどが渇く場合のように、生理的な原因から生じます。身体が水分を必要とする事の証ですから、一定量の水を飲めば治まるのがふつう。欲求が治まらずに、1 リットルも 2 リットルも飲み続ける人はいない——いれば、病気です。

これに対して、「欲望」は一定の目標に達することで終わる、ということはありません。例えば、金銭欲。当初は 100 万円を貯めるという目標だったのが、それをクリアすると、次は 1 千万円、さらに 1 億円…というように追求に果てしがたいというのが、「欲求」ならぬ「欲望」の特徴です。私のこの本——『邂逅の論理』提示——では、近代資本主義の本質が、欲望を開発する〈欲望の論理〉にあると指摘しています。簡単に言えば、〈欲望の論理〉とは、資本主義の原理。自然や人々を〈資源〉として利用する〈欲望〉が、近代世界をうちたてた西洋から全世界に広がって、今日の環境危機をもたらしたという趣旨です。「南北問題」の根源は、グローバル化した欲望にある、という見方です。

### 欲望と技術

私の本では、特に技術、テクノロジーを主題として論じていませんが、〈欲望の論理〉の底に二元論があること、科学技術の土台が二元論であることから、当然、欲望と技術の関係が問題になってきます。二元論は、主客をまったく別のものとする発想。17 世紀のデカルトが、「我思うゆえに我あり」として、考える精神と延長物体を分離して以来、心と身体、人間と自然が分断され、主体から切り離された客体（自然、他人）は、主体の意のままに操

作できる〈資源〉となりました。この成り行きは、二元論の発想——それ自体、何も間違っ  
てはいません——から、二者の間（あいだ）が取り落とされ、閉ざされたことによるもの  
です。二元論によって〈あいだ〉が閉ざされる時、客体はそれを支配しようとする〈欲望〉  
の視線にさらされ、支配利用の対象となる以外にない。科学技術は欲望と結びつき、欲望と  
一体になって、環境破壊を推し進める原動力になってきました。

いま「科学技術」と一括りにしましたが、「科学」と「技術」は違います。「科学」が解明  
した自然のメカニズム、それに介入して利用する手続きを具体化するのが、「技術」の役割。  
科学と技術は、たがいに支え合い、たがいに依存し合って、パートナーシップを形成します。  
自然破壊の元凶という点で、科学と技術は同罪です——ドギツイ言い方をお許してください。  
いまは科学技術の功罪のうち、「罪」の方に照準を合わせた話をしています。技術と欲望の  
結びつきを、もう少し説明します。

技術は、ある状態から出発して、目標を達成するための手段です。出発点と目標点を設定  
することから始まります。出発点と目標点の距離が明確で、手段と目的の関係がはっきりし  
ている場合には、欲望は生じない。そういう距離が不明な場合、たとえば、取り組みととも  
に目標点が蜃気楼のように遠ざかっていく場合、「見果てぬ夢」を追い続ける欲望が生じて  
くる。「人間をつくる」というロボット工学の目標が、その典型例です。〈ロボット＝人間〉  
は、絶対に達成不可能な目標です。工学技術の出発点が、人間と物体を分ける二元論である  
以上、二つのものの隔たりは原理上越えられない。しかし、越えられないにもかかわらず、  
いや越えられないからこそ、何とかして壁を越えたい、というのが欲望の本質です。

## 欲望のゆくえ

欲望は充たされるでしょうか。二つの方向が考えられます。一つは、ロボットを人間に近  
づけること——ロボットの人間化。技術者の取り組みです。もう一つは、人間をロボットに  
近づけること。これは、技術者よりもむしろ一般社会が関係します。最近の動向は、この二  
つが相俟って、欲望が充足されたかのような幻想を生じさせています。第一の方向は、池上  
先生が取り組まれている「人工生命」の開発が典型的で、「複雑系」の扱いが肝になってい  
ます——専門外ですので、その方面のことは省略します。先生と組んで研究している石黒浩  
という方は、自分にそっくりのロボットをつかって、人間と機械の隔たりを越えようとして  
いますが、大きな問題があります。それは、越えられない壁が超えられるという錯覚を、人々  
に惹き起こしていることです。これは、第二の方向——「人間のロボット化」——に関係しま  
す。技術は万能ではなく、限界をもちます。どれだけ人間にそっくりなアンドロイドをつく  
ろうと、越えられない壁を「越えた」とする錯覚は、呪術(magic)に特有です。丑の刻参り  
の藁人形は、本人ではなく、その身代わりとして、本人と等価であるとみなされる。イシグ  
ロイドはそれと同じで、ここにあるのは、技術というよりも呪術の世界です。

しかし、これを「お呪い」の類と言って放置できないのは、呪術にたぶらかされて盲目と  
なった連中、とりわけ若者が多くいることです。「精巧につくられたロボットは人間である」、

真顔でそんなことを言い放つ学生が、近年、私の勤める哲学のコースに増えてきました。なぜそんなことを言うのか、何年も考えてきましたが、ここに来てその理由が解りました。「ロボットは人間である」という言葉の裏に、「人間はせいぜいロボットと同程度にすぎない」という、もう一つの判断、人間否定の意向が働いています。ハイテク社会の現代、人間が、従来その存在の証としてきた「高貴な」人間性など、発揮すべくもない。「人間」としてまともに生きられない以上、自分はロボット並みで沢山だ…これが若者のホンネです（30年余の教師生活から、事例がいくつも挙げられます）。人間が人間として生きられない現実、それを彼らは、「ロボットが人間である」という逆説によって訴えているのです。重ねて言うなら、若者は「人間」として生き続けることのプレッシャーに押しつぶされています。石黒氏はいかにもアホに違いないが、現代社会の実相を私に解らせてくれた「恩人」だ、そう言えなくもありません。

### 「技術の哲学」に向けて

私はこの5月に、テクノロジーをテーマとしてソウルで開かれた国際ワークショップ「今日の風土の政治学」(Politics of Milieu Today)に参加しました。私を招いたのは、香港出身の中国人 Yuk Hui (許煜)、気鋭の技術哲学者です——本提示。それが、私に技術の問題を考えさせるきっかけになりました（それ以前に、技術を論じたことはありません）。ホイは、サイバネティクスから想を得て、機械と生命の〈あいだ〉を開く *cosmotechnics* (宇宙技芸) を提唱しています。いまのところ、それに期待をかける以外にありません。デンソーに貴重な機会を与えていただきましたが、〈欲望の論理〉を克服するための技術、および企業社会のあり方を、現時点で提言できるだけの用意は、当方にはありません。これからの喫緊の課題と受けとめています。

今回、私のような素人と組んでくださることになった池上先生から、教えていただきたいことがたくさんあります。今回の出演について交渉を受けた時点で、先生が石黒氏と共同研究されていると聞いて、最初、石黒の同類かと思いましたが、前回の催しに参加し、またご著書を拝読して、そうでないことがよくわかりました。ご本の内容は、共感する点、腑に落ちない点、いろいろありますが、対話のパートナーとして願ってもない方であることを確信しました。よろしくお願ひします。

[対話のために]

#### 質問点

##### ・二元論について

- ① ロボット工学、機械技術が前提とする二元論をどう考えるか。
- ② 「中間層」の想定は、二元論を「超える」もしくは「否定する」思想の表れと見うけられるが、どうか。

##### ・「人工生命」について

- ① デカルト主義が立脚する「我」の**自己意識**を、機械（非生命＝外部入力でエネルギーを与えられる物体）はつくりだすことができない。生命と非生命の絶対的隔たりを、どう越えるのか※。
- ② 他人の心の中は窺い知ることができないから、そのふるまいの観察をつうじて、「心」を推断する、という行動主義。行動主義の立場は、ア) 心があることを認める、しかし、イ) 心の中を知ることにはできない、だから、ウ) 行動を「心」と等価に置く、というもの。そこから、「心など存在しない」という唯物論までは一步の距離。先生は、どの立場か？
- ③ 〈自己〉とは「意識」の主体であること。「私が私である」という意識によって、「私」は「あなた」でないという確信をもちうる＝独我論的意識。このような意味での「意識」は、他の特性に置き換えることができないと、考えるがどうか？ ① 〈私〉の自己意識（「われ思うゆえにわれあり」の自覚）を、「人工生命」はつくれるか？ 答えは、たぶん「否」。② 「独我論的」でない意識のあり方（ex. 他の人間・ロボットとのインタラクション）しか、技術の世界では取り扱えない。それは、③ 〈私〉の生命ではない、という反論が可能である。それで平気なのか。

※デカルト的コギトによるなら、「意識」は、生命と非生命を区別する指標であると同時に、〈自己〉と〈非自己〉を分ける指標でもある（他人にも自分と同じ意識があるかは判らない、とする独我論）。独我論的前提に立つなら、われわれは他人に「心がある」と認めることはできず、あたかも「心がある」かのようにふるまうこと（ex. 言語使用、コミュニケーション等の観察可能な事実＝間接証拠）をもって、人間的生命体であると考えていいのか——池上氏への質問。(a)じっさいに「意識をもつ」ロボットがつけられる、と考えるのと、(b)意識がある「かのように」ふるまうロボットを製作する、のとでは天地雲泥の差がある。先生はどちらか？

追い打ち——もし(b)だとするなら、あなたから見た場合、(c)私に「心がある」と言明することはできない、ということになるのか。それとも証明抜きに（直観的に）、(d)私に「心がある」という事実を受け容れるのか。(d)であるなら、あなたは「人間」と「ロボット」の扱い方に差別を設けている（「自己意識」をもつ人間に、特権的地位を認めている）ことになる。科学者の立場としては一貫しない。

・〈欲望〉について

- ① 「欲」への言及：「創造性や自己参照性、あるいは欲とか遊び、そういったものは身体性の無意識の中にある」（『人間と機械のあいだ』p.210）。私の考える〈欲望の論理〉と関連すると思われるが、「身体性の無意識」にかかわる「欲」とは何か。
- ② 技術開発は、明示的な二元論が暗黙的な無意識の欲動と一体になることで行われる、というのが私の見解。それを認めるか、認めないか。
- ③ 「人工生命」をつくるという技術が、欲望を超えること（欲望を止揚した技術）は可能か。